

生徒を主役に

重松 晴美

定時制高校の教科指導でなによりも苦心しているのは、いかにして生徒を授業に参加させるか、ということである。学習意欲に欠け、昼間の仕事の疲れを色濃く残している生徒に対しての授業は、教員の側からだけの一方通行では学習効果はあげられないのではないかと思う。国語という教科の性質上、生徒の側からの積極的な授業参加が重要であることは言うまでもないが、定時制の授業においては、その面をより一層強めていく必要があるだろう。

生徒が主役となるような授業方法はないだろうか。新卒採用で赴任して二年半、いくつかの方法を試みてはいるが、なかなか期待したような感触は得られない、というのが現状である。その中で微かながら手応えを感じる事ができたものに、生徒による報告・教授形式での漢字学習がある。

日頃自己発現の機会の少ない生徒に、一つの表現の場を与えたいと考え、半年ほど前から始めている。自分の体験や意見を発表するスピーチは、現在の生徒の状態ではまだ困難であると

思われるため、橋渡しのものとして、それまでは教員側の指示で行っていた漢字学習を生徒にまかせてみることにした。

今年度私が担当している二年生の国語Ⅰは週二時間の授業であり、そのうちの前半十五分を漢字学習にあてている。まず、あらかじめ、次回の授業で学習する漢字の音訓、筆順、熟語例等と書き取り問題のプリントを生徒全員に配布し、宿題とする。同時に報告・発表者も指名しておく。当日の授業では、私は教室の後ろに下がり、十五分間はその生徒が先生役となる。問題の答えあわせをし、調べてきたことを報告・解説するのである。

はじめのうちこそ教壇で立ち往生してしまったり戸惑いがちであったりした生徒も、回を重ねるにつれ、ものを教えること、伝えることに関心を示し始めている。また、先生役の生徒の個性によって毎時間新鮮味が生まれ、受け手側にとっても興味深いものとなっているように思う。教壇に立っているのが同級生という気安さもあるせいかな、質問も積極的に出てくるようになった。

今後は漢字学習という、いわば単純作業中心のものにとどまらず、古典や現代文など生徒自身より深い考察・表現力を必要とするジャンルにも発展させていきたいと考えている。

(東京都立南多摩高等学校校定時制)

「表現」についての雑感

鈴木優子

卒業後の生き方で、本当の意味での「早稲田人」になれるか否かが決まる、そう思いながら大学を後にした。既に半年がたち、新たにこの思いを胸に灼きつけている。

社会に出てゆくとき、切に感じたことは、「自己表現」の大切さだった。自分を表現できるということは、自分の中に表現できる「何か」があるということだ。むろん、その時だけの付け焼ぎ刃では済まない。「何か」である。私は「国語」という授業を通して、生徒達それぞれの中にある「何か」を探る機会を与えてあげることができたらと、大それた考えを持ちながら毎日教壇に立つ。しかし、たとえ「何か」を持っていたとしても、それを表現してゆく手段を持たないと、せつかくの「何か」も台無しになる。「自己表現」といういかにもありふれた言葉の中に、二重の困難を見る。

教壇に立つようになって認識したことは、生徒達のおしゅべり、上手と表現、下手だった。年間六冊を目標に定期的に提出させ

る読書感想文の中に、日頃の話し言葉をそのまま文章にしているものが少なからずある。「マンガ文字」ならぬ「マンガ言葉」も頻出する。しかし、だからと言って、内容まで稚拙かというと必ずしもそうではない。なかなか鋭い感性を閃かせている。これは正に表現、手の象徴だと思う。「読解」ほど「表現」が鍛えられていないのだから。

右の様な問題の重大性を認めながら、現在授業の中でこれを矯正してゆく余裕がない。読書感想文ノートと赤ペンという極めて個人的なお付き合いの中で矯正してゆくだけだ。しかし、それだからこそ、ノートと赤ペンの付き合いを大切にしなければならぬとも思う。私の拙い赤ペンでも、生徒達の次回の読書への励みになるのならばなおさらのこと……。

教壇に立つようになってから六か月。教える立場でありながら、教えられたことの方が多かった。たとえ悩みがあったとしても、明るく元気良く悩んでしまう彼達達のなんと頼もしいことか……。『社会人としての婦人を育てる』という教育方針を持つ学校の中で、将来の大きな可能性をちらちらと見せながら今日も元気よく悩んでいる。そんな彼女達に毎日接することのできる喜びをかみしめながら、「負けてはいられない！」と決意を新たにす。

(共立女子第二中学・高等学校)